

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01475

研究課題名(和文)世界秩序構想としての「翻訳」の意義に関する政治社会学的研究

研究課題名(英文) Political Sociological Research on the Significance of "Translation" as a
Conception of World Order

研究代表者

施 光恒 (Se, Teruhisa)

九州大学・比較社会文化研究院・教授

研究者番号：70372753

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、広義の「翻訳」(異なる文化圏で生まれた様々な思想、制度、知識、物品を自分たちの文化圏に適合するように受け入れ、自文化を豊かにする行為)の意義に着目し、そこから現行の新自由主義に基づくグローバル化とは異なる、より公正な「ポスト・グローバル化」の世界秩序を構想するものであった。現行の新自由主義に基づくグローバリズムに対する思想的・哲学的批判、およびより妥当な人間観に基づくポスト・グローバル化の多面的な世界秩序構想を描き出すことを目指した。当初の研究計画であげた目標はほぼ達成し、ポスト・グローバル化の世界秩序のあり様、およびそこに至るための条件について多様な角度から論じることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、新自由主義に基づくグローバル化のもたらす諸問題、およびその是正という極めて現代的なトピックに着目したうえで、「翻訳」という理念の規範的意義を見出した点にある。いくつか挙げれば、「翻訳」は、日常の共通文化のうえに、外来の多様な知識を適切に位置付けていくことにより、一般庶民にとって「アクセスしやすい(なじみやすい)多様性」をもたらす。これは格差社会化を防ぐ。また社会的連帯意識を保全できる。加えて、日常の言語で知的かつ専門的な議論が可能になることから、多くの人々の創造性の発揮も期待できる。以上のような利点から、翻訳は、活力ある、平等かつ民主的な社会の基礎を作るうえで大いに役立つ。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the significance of "translation" in a broad sense (the act of enriching one's own culture by accepting various ideas, systems, knowledge, and goods created in different cultural areas so that they fit into one's own cultural area). From this perspective, this study aimed to show a more just "post-globalization" world order, different from the current globalization based on neoliberalism. This study provided an ideological and philosophical critique of globalism based on the current neoliberalism, and envisioned a post-globalization pluralistic world order based on a more reasonable view of humanity.

研究分野：政治学

キーワード：グローバル化 グローバリズム 新自由主義批判 リベラル・ナショナリズム 翻訳 平等 格差是正

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景として二つの面から論じたいと思う。社会現象面と学術面である。

一つは、当時(2018年頃)の社会現象である。いわゆる新自由主義に基づくグローバル化路線が引き起こした諸問題が欧米社会を中心に顕在化していた。一国内における経済的格差の拡大、民主主義の機能不全、国民意識の分断などの諸問題である。また、こうした諸問題に対する反発として生じたのが、2016年の英国のブレグジット、米国でのトランプ前大統領の選出、2018年から生じた仏国の黄色いベスト運動などである。英仏以外の欧州諸国でもいわゆるポピュリズム政党が台頭していた。フランスの知識人エマニュエル・トッドの言葉を借りれば、まさに各国庶民の「globalization fatigue」(グローバル化疲れ)が表面化していた。

日本でも、「上級国民/一般国民」といった言葉が流行し、国内の経済的格差の拡大や国民意識の分断が、欧米ほど顕著ではないが、見られるようになっていた。

第二に、学術面である。米国など欧米諸国ではグローバリズムが引き起こした諸問題が広く意識されるようになり、学界や論壇で活発に議論されるようになっていた。

例えば、本研究が影響を受けたものとしては、米国の政治学者パトリック・J・デニーンPatrick J. Denierの議論がある。

デニーンは、グローバリズムやその根源にあるリベラリズムの思想について厳しい批判を提示していた。特に、それらの前提にある極度に抽象化された人間観を問題にしていた。すなわち、特定の時間や場所とのつながり、および他者との関係性から切断された人間観である。また、そこから派生する自由観も批判していた。つまり特定の文化や慣習、言語の影響を脱することこそ、自由の実現につながるという見方である。この見方では、個々人が生れ落ちた文化の影響から脱し、より普遍的で合理的な枠組みに参加することこそ、個々人の自由の実現につながるという見方が生じてしまう。こうした考え方が、暗黙裡のうちに、多くの人々(特にリベラリズムを信奉する知識層)の共有するところとなった。

この見方では、まさにグローバリズムが推奨されることとなる。個々人は、生れ落ちた文化を脱し、普遍的で合理的でグローバルな秩序枠組みに参加することこそ、人々を自由にする。このように考えられてしまう。デニーンは、こういう事情を踏まえて、リベラリズムは「反・文化」であると指摘する。

本研究では、以上の社会面と学術面での問題を認識し、それらを乗り越えるために「翻訳」というものに着目した。つまり、社会面では、自由民主主義社会の基礎を揺るがすグローバリズムの諸問題をいかに解消へと導くか、その方策を考えた。また学術面では、本研究は、グローバリズムやリベラリズムの人間観は非現実的であるし、またそれに基づく自由観も、各国・各地域の文化の意義を認識することができない奇妙なものだと捉えた。それゆえ、グローバリズムやリベラリズムの前提するこうした人間観や自由観を改めたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、新自由主義に基づく現行のグローバル化の秩序構想を哲学的・思想的水準で批判することである。また、より公正な「ポスト・グローバル化」の秩序構想を描き出すことである。この大きな目的の達成のために、具体的には「翻訳」という行為、ならびにその背景にある人間観などの諸前提に着目した。

「翻訳」という理念に着目した理由の一つは、現行の新自由主義に基づくグローバル化と対照的な人間観に立つものだからである。前述の通り、現在のグローバル化の根底にある人間観は、文化を自我の構成的属性として持たず、単なる選択の対象としうる存在として人間を捉えるものだといえる。

他方、「翻訳」という理念が前提としている人間観は、特定の文化や言語を自我の欠くべからざる構成要素の一部として捉える見方である。多数の平均的人間は、母語や母文化の影響から完全には逃れられない存在だと理解する。

この人間観の下では、自由の実現に必要なのは、母語や母文化の影響からの離脱促進ではなく、逆に、母語や母文化を基礎にした多様性の充実である。人が最も自由自在に思考したり行為したりできるのは母語や母文化においてだと捉えるからである。

ここで「翻訳」の重要性が認識される。「翻訳」は、ある言語や文化の多様性を増す基本的かつ効果的な方法だからである。「翻訳」とは、異なる文化圏で生まれた様々な思想、制度、知識、物品を自分たちの文化に受け入れ、変容し、位置付けていくことにより、自文化の多様性を増大させる行為である。「翻訳」理念からは、現行のグローバル化とは異なる理想的秩序像を導くことができる。それは多数の文化が併存・共存し、互いの文化から絶えず学び合い、自らの文化の多様性の拡充を各々図っていく世界秩序である。いわば「積極的に学び合う、棲み分け型の多文化共生秩序」だということができる。

本研究の学術的独自性は、まず「翻訳」の理念から規範的意味を見出し、現行のグローバル化

に対する代替的世界秩序構想を導き出そうとする点に求められた。近年では、文学研究や文化研究において“translation studies”というディシプリンが生まれ、異文化理解の方法としての「翻訳」の意味や意義についての研究も進んでいる。また、わが国では、丸山真男や加藤周一、柳父章らに代表される翻訳の観点からの日本の文化や歴史に関する研究の蓄積は少なくなかった。

本研究の独自性としては、こうした分野の研究蓄積を幅広く参考にしつつも、新自由主義に基づくグローバル化のもと諸問題という極めて現代的なトピックに着目したうえで、「翻訳」という理念の規範的意義を見出した点にある。

いくつか挙げれば、「翻訳」は、日常の共通文化のうえに、外来の多様な知識を適切に位置付けていくことにより、一般庶民にとって「アクセスしやすい(なじみやすい)多様性」をもたらす。庶民が、参加しやすく、能力を磨き発揮しやすい社会空間を作り出す。この手法は格差社会化を防ぐ。また社会的連帯意識を保全できる。加えて、日常の言語で知的かつ専門的な議論が可能になることから、多くの人々の創造性の発揮も期待できる。以上のような利点から、翻訳は、活力に富んだ、平等かつ民主的な社会の基礎を作るうえで大いに役立つ。

また、「翻訳」という理念に着目することを通じて、日本の歴史的経験や文化的なものの見方に親和性の高い世界秩序構想の提案につながりうるという点も指摘し得る。日本の近代史や文化の発展史を「翻訳」を手掛かりに論じた研究は少なくない。「翻訳」は、日本の歴史や文化と密接なつながりを持つと言える。本研究では翻訳という理念の諸前提や規範的意義を明らかにしつつ世界秩序構想を導き出すことを試みるが、これは日本の様々な経験が寄与しうる世界秩序構想の提案につながる。多くの日本人にとって腑に落ち、心から賛同できる日本発のオリジナリティある秩序構想の提案につながる可能性が指摘できる。

3. 研究の方法

研究の方法としては、次のようなものであった。まず、個人での文献に基づく研究である。グローバリズム研究に関する書籍のみならず、翻訳研究の分野や主に文化面からの日本の近代史の資料を集め、読み込んだ。

第二に、定期的な研究会(二か月に一回)の開催である。これについては、実施期間中、ほぼ実現できた。ただ、2年目の2020年度からはコロナ禍が始まったため、なかなか対面で集まることはできず、オンラインでの研究会が多くなった。

第三に、シンポジウムの開催である。第一回目は、評論家中野剛志氏を招き、大規模なシンポジウムを開催した。その後、コロナ禍もあり、大規模なシンポの開催は少々困難になった。ただ、規模は小さいが、幾人かの識者を招き、数回研究会を開催した。また、最終年度には、講演会も開催した。

4. 研究成果

本研究の研究成果として、現在のところ、次のような事柄を挙げることができる。当初の研究計画で掲げた諸点に分け説明したい。

新自由主義に基づく現行のグローバル化に対する批判について

本研究では、現行の新自由主義について、哲学的・思想的水準の批判的検討、および現在進行中の各地の反グローバリズムの社会運動の調査を行うことを当初、予定していた。米国のトランプ現象や欧州における反EU政党の台頭などの社会運動である。

これらについて前者は、かなり進めることができた。代表者や分担者は、それぞれ学術的、あるいは一般向けの書籍や論文、論説で、それらについて提示することができた。

後者については、コロナ禍の影響もあり、あまりできなかった。後者については、今後、補っていきたい。

秩序構想における「翻訳」の規範的意義の明確化

「翻訳」を通じた秩序形成には、「庶民が参加しやすい多様性を形作る」「庶民が能力を磨き発揮しやすい環境を作る」「知的・経済的格差が生じにくい」「社会的連帯意識を保全しやすい」「多数の人々が創造性を発揮しやすい」といった利点がある。政治学、政治経済学、経済史、教育学などの多角的観点から以上の利点について明確化した。

例えば、ごく一部のみ具体的に示せば、施「日本の人権受容における宗教文化的土台」(長谷千代子、別所裕介、川口幸大、藤本透子編『宗教性の人類学 近代の果てに、人は何を願うのか』法蔵館、2020、所収)などで議論することができた。

「翻訳」を通じた秩序構想の実例としての日本の国づくり

「翻訳」による秩序構想が組織的に展開した一例として明治～昭和の日本の国づくりの過程に着目した。多数の先行研究を上記の規範的意義の観点から再解釈し整理していくという課題についてであるが、これについては、人権という制度に関しては上記の施の論考、文化史の分野では主に佐藤慶治氏の戦後の音楽教育分野の研究などで論じることができた。

「翻訳」の理念に基づく代替的世界秩序構想の探求

「翻訳」という理念から、現行の新自由主義に基づくグローバル化に対する代替的世界秩序構想を描き出すという課題であった。

この点については、代表者、分担者がそれぞれ論文や著書の中で論じてきたが、現在進行中の部分も多い。本科研の期間中、理想的な世界秩序に関する公的議論をより活発化していくためには、「グローバル化」と「国際化」との概念的に区別が必要だという着想を得た。それに関し、科研費を用い、最終年度に比較的大規模な社会調査をすることができた。日本において、この二つの概念がどのように認識され、また、「グローバル化」と「国際化」のどちらの理念がより望まれているかという社会調査である。この調査の結果、およびそれから何が言え、どのような世界秩序構想がより望ましいと言えるのかなどの論考については、今後、発表していく予定である。

なお幸いにして、本科研と同じメンバーで、後続の科研の研究「脱グローバル化の新しい多元的世界秩序構想、および「日本型」社会構想に関する研究」を得ることができた。こちらの科研において、本科研の問題関心を継続し、理想的な成果秩序のあり方、さらには、その中での我が国のあり方について探求を継続していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 施 光恒	4. 巻 70
2. 論文標題 ポスト・グローバリズムの世界秩序の探求 カール・ポパーのナショナリズム論に対する批判的検討を手がかりとして	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『政治研究』	6. 最初と最後の頁 30-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/6777115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 540
2. 論文標題 「新世界内戦」下で直面する経済危機	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Voice	6. 最初と最後の頁 90-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 29
2. 論文標題 新自由主義から新重商主義へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 183-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 41
2. 論文標題 グローバル化時代の戦争	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人環フォーラム	6. 最初と最後の頁 2-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 2022年1月号
2. 論文標題 新自由主義的「無力感」から抜け出すために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『表現者クライテリオン』	6. 最初と最後の頁 54-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 2021年11月号
2. 論文標題 日本再生の鍵は職人の伝統にあり "棟梁" 小川三夫に聞く	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『表現者クライテリオン』	6. 最初と最後の頁 66-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 2021年9月号
2. 論文標題 郷愁 (ノスタルジア) について 近代のもう一つの側面	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『表現者クライテリオン』	6. 最初と最後の頁 175-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 2021年7/8月号
2. 論文標題 歴史から考える「グローバリゼーションの終焉」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『世界経済評論』	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤慶治	4. 巻 2022年3月号
2. 論文標題 NHK「みんなのうた」にみる日本の規範	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 214-219
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 施 光恒	4. 巻 12(2)
2. 論文標題 ナショナリズムは批判的合理主義の観点から擁護可能か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 批判的合理主義研究 (日本ポパー哲学研究会)	6. 最初と最後の頁 14-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 3
2. 論文標題 ケインズの文明社会論：モラルサイエンス私論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ひらく	6. 最初と最後の頁 125-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 511
2. 論文標題 世界経済の試練と「新たな帝国主義」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Voice	6. 最初と最後の頁 78-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 23(5)
2. 論文標題 経済危機、医療危機、食糧危機：新型コロナ問題で求められる発想の大転換	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ビッグジャーナル	6. 最初と最後の頁 50-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 14
2. 論文標題 伝統論の系譜学 T.S.エリオットから日本へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 146-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 16
2. 論文標題 郷愁と伝統	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 118-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 24(1)
2. 論文標題 コロナ以後の大変動に備えよ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ビッグジャーナル	6. 最初と最後の頁 49-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 4
2. 論文標題 「新しい伝記文学」から経済学へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ひらく	6. 最初と最後の頁 196-202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤慶治	4. 巻 2021年3月号
2. 論文標題 《ダウントン・アビー》にみるサムウェア族的価値観とブレグジット	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 185 - 189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 2019年7月号
2. 論文標題 中間集団の抵抗力	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 157-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山桂太	4. 巻 2020年1月号
2. 論文標題 東アジアの「戦争」はもう始まっている	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 54-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤慶治	4. 巻 2020年3月号
2. 論文標題 唱歌教育にみる日本文化の連続性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 193-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤慶治	4. 巻 18、19合併号
2. 論文標題 明治期唱歌教育の発展に関する考察 中学校向け唱歌から女学校向け唱歌への流れ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 礼拝音楽研究	6. 最初と最後の頁 33-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 施光恒	4. 巻 2020年1月号
2. 論文標題 「言語に着目する理由 言葉から考える(1)」(やわらか日本文化論)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 表現者クライテリオン	6. 最初と最後の頁 158-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 柴山桂太
2. 発表標題 「グローバル化時代の「戦争」」
3. 学会等名 比較文明学会第40回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 施 光恒
2. 発表標題 ポスト・グローバリズムの世界秩序の探求 カール・ポパーのナショナリズム論に対する批判的検討を手がかりとして
3. 学会等名 政治思想学会第29回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 施 光恒
2. 発表標題 日本の文化的特徴から導き出される人権論の構想 「日本型リベラリズム」に向けての序論的考察
3. 学会等名 比較文明学会九州支部
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 施 光恒
2. 発表標題 グローバル化は「進歩」「時代の趨勢」だと言えるのか 新自由主義的な通俗的歴史観を疑う
3. 学会等名 日本国史学会 第88回連続講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 施 光恒
2. 発表標題 ナショナリズムは批判的合理主義の観点から擁護可能か（シンポジウム「グローバル化とナショナリズム」における発表）
3. 学会等名 日本ポパー哲学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 施 光恒
2. 発表標題 多言語学習と多元的世界
3. 学会等名 日本外国語教育推進機構 (JACTFL) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 施 光恒
2. 発表標題 リベラリズム理解の欠陥と現代社会の苦境 P・J・デニーンの議論を手掛かりに
3. 学会等名 経済学史学会 第83回大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 施 光恒
2. 発表標題 人権理念の日本の理解とその生命倫理への示唆
3. 学会等名 第37回 西日本生命倫理研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤慶治
2. 発表標題 NHK児童音楽番組「みんなのうた」の楽曲出典に関する研究 海外民謡を中心に
3. 学会等名 音楽学習学会 第15回研究発表大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤慶治
2. 発表標題 戦後日本の児童向け図書・雑誌に見る児童音楽再編に関する考察
3. 学会等名 日本児童文学学会 第58回研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 マイケル・リンド / 施 光恒（監訳）、寺下滝郎（翻訳） / 中野剛志、施光恒（解説）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東洋経済新報社	5. 総ページ数 294
3. 書名 新しい階級闘争 大都市エリートから民主主義を守る	

1. 著者名 施 光恒	4. 発行年 2021年
2. 出版社 創成社	5. 総ページ数 326
3. 書名 水野勝之・土居拓務編著『イノベーションの未来予想図』（第6章第2節「英語化は日本社会にイノベティブな環境をもたらすだろうか」（289-295頁）を執筆）	

1. 著者名 施 光恒	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 420
3. 書名 長谷千代子、別所裕介、川口幸大、藤本透子編『宗教性の人類学 近代の果てに、人は何を願うのか』（第3部第10章「日本の人権受容における宗教文化的土台」（285-322頁）を執筆）	

1. 著者名 施 光恒	4. 発行年 2020年
2. 出版社 創成社	5. 総ページ数 304
3. 書名 水野勝之編『コロナ時代の経済復興 専門家40人から明日への緊急提案』（第6章第一節「『国民の絆』という日本の強靱化の基盤」（228-235頁）を執筆）	

1. 著者名 柴山桂太	4. 発行年 2019年
2. 出版社 藤原書店	5. 総ページ数 408
3. 書名 荻野文隆編『崩壊した「中国システム」とEUシステム』（第 部第五章「グローバリズムの制約を超えて」（168-174頁）を執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	柴山 桂太 (Shibayama Keita) (30335161)	京都大学・人間・環境学研究科・准教授 (14301)	
研究分担者	佐藤 慶治 (Sato Keiji) (10811565)	精華女子短期大学・その他部局等・講師 (47115)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------